
愚案短章の一『いじめられっ子の春子ちゃんに恋をしてしまった……』

りきてっくす

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚案短章の一『いじめられっ子の春子ちゃんに恋をしてしまった

.....
』

【ZPDF】

Z5830E

【作者名】

つきてつくす

【あらすじ】

誰かを好きになってしまふ瞬間なんて唐突にやって来る……。僕は、イジメられっ子の春子に恋をした。

例えばの話である。

新学期の学級編成で、クラスメイトの顔ぶれがシャッフルされ一新されたとしよう。

自分の周りを知らない顔がずらりと取り囲み、隣の席に座るのは、廊下で何度もすれ違つただけの全く面識のない生徒……。その人がどういう性格で、何を趣味にしていて、だれと仲良しなのか、とんと見当もつかない。でも、あなたは、早く仲の良いお友達を作つて安心したいはずだ。この隣の席に座つている生徒とお友達になりたい。孤独はイヤだ。ひとりぼっちは心細い……と思つたとしよう。

では、ここで質問です。

初めて顔を合わせたA子ちゃんとB子ちゃんが、もつとも手つ取り早く、しかも強力に親密な関係を築くにはどうしたら良いでしょう？

さあ、考えてみてほしい。

何か共通の趣味がないかをさがす……？ ブーッ！ （不正解のブザー音です……） 趣味というものは、はなはだ深淵であり、その喜びを分かち合うためには、長い々々年月を要するものです。

好きな男子の話で盛り上がる……？ ブーッ！ もし、意中の人aga同一人物だつたら、たちまち修羅場になりますよ。
将来の夢について語り合つ……？ ブーッ！ 下心、見え見えの合コン即席カツプルじゃないんだから……。

では、正解を申し上げましよう。

初めて顔を合わせたA子ちゃんとB子ちゃんが、もつとも手つ取り早く、しかも強力に親密な関係を築くには……一人に共通の敵、C子ちゃんを作り上げることです。

「ねえねえ……、C子ってキモイよねー！」

「あっ！ 私もそう思う～。あの子の側通るときつてえ、思わず息

止めちゃうんだよねー！」

「なんか私達つてえ、案外気が合うのかもね！　じゃあ今日からこ子に話しかけられても無視しようね！」

「うんうん、そうする！」

つてもう、これだけでA子とB子は、百年来の大親友になれることが請け合い！

悲しいかな、人というものは、共通の敵を持つ事によって最も結束するのです。ナチスによるユダヤ人虐殺でも分かるように、これは人類の長い歴史の上からも証明されている真理であり、為政者が愚民の心を掌握するための政治手法として、現在でも大いに役立っているのです。

さて、日本人というのは、21世紀の今日に至っても村人根性丸出しの民族で、自分の中に他の村人達と違う部分がある事をこの上もなく嫌い、そして、これに恐怖すら感じるのです。

A子とB子が、阿吽の呼吸でC子を攻撃しているのを見て、ブームに乗り遅れでは困るどばかりにD子とE子とF子がこれに加わる。そしてE子と仲良しのG子とH子、更にF子と同じバレー部員のI子とJ子も加わり……。

こうなってくるともう袋だたき状態。C子の味方は一人もいなくなり、それと同時にクラスの中に、えも言われぬ連帯感と団結力が生まれ始めます。

可哀相なC子……。彼女は、クラスのみんなが仲良しになるための生け贋となり、毎日毎日、みんなからイジメられる事になってしまったのでした……。

C子の名は、春子といつ。

春子は、何処にでもいそうな普通の高校2年生だ。とくに容姿に特徴があるわけでもなく、また性格に問題があるわけでもない。成績も中くらいで運動音痴というわけでもなく、全てにおいて平均点の、まあ言い方は悪いが、毒にも薬にもならない目立たない存在の

女子だ。

彼女が、不幸にして他の女子からイジメを受けるようになつた理由は先に述べたが、我々男子としては、その事に関知する余裕は全くないし、また興味もなかつた。男子には男子の社会があり、当時の僕達は、その社会に適応し、はじき出されないように日々を生き抜く事で精一杯だったのだ……。

春子は、ちょっと人見知りする質のようで、初対面の相手に対しても些かぎこちなく接してしまい、また若干ではあるが話す言葉のイントネーションにどこか東北地方のような訛りの片鱗がうかがえた。そんな些細な理由だけでイジメの対象になつてしまつたとしたら驚きであるが、人がイジメられつ子になる瞬間なんて、案外、交通事故に遭うようにきわめて偶発的に訪れるのかも知れない。ともあれ春子は、自分に向けられたイジメに対して、相手が期待するようなアクションをしない人だったので、夏休も終わり、みなが真っ黒に日焼けした頃になると、彼女に対するイジメは無視というかたちで、ほぼ定着されていた……。

さて、女子に比べて男子は思春期の到来が遅いといわれるが、さすがに高校生となると、ニキビ面の男子諸兄も次第に色気づき始めてくる。学校帰りに立ち寄る喫茶店では、もっぱら可愛い女子の話題で持ちきりとなり、「あの娘が最近髪型を変えた」とか「この娘のスカート丈が短くなつた」などと他愛もない話に夢中になつては、慣れないタバコを夢見心地でフカしていたのである。ご多分に漏れず、僕にも好きな女子が何人かいた。“何人か……”というところに僕の不真面目さが露呈されるが、“この娘は僕の天使だ！”などという切羽詰まつた恋愛感情には至らないレベルの話であつて、ようするに、ただ何となく“いいな～”と思つた程度の“好きな女子”なのである。

しかし、この“何となく好きな女子”の中に、他の男子のリストには決して入つてない名前が混じつていた。

春子である……。

彼女は、いつも一人で教室の隅つこの壁に寄り掛かり、熱心に文庫本を読みふけっていた。どんな本を読んでいたかは、花柄のブックカバーに邪魔されて知る由もなかつたが、静かな眼差しで一文一文を噛みしめるように読んでいたところを見ると、小難しい純文学に違いないと普段コミックしか読まない低レベルな僕は思ったものだ。そして、まるで本の世界に逃げ込むように読みふけるその姿に、キャアキャアと騒がしい同年代の女子とは違う”大人の女”的魅力を感じてしまったのである……。

季節は、秋になり学園祭のシーズンとなつた。僕たちのクラスは、ありきたりの生バンド喫茶みたいなものを出店する事になり、学級委員という名の雑用係をやらされていた僕は、出店準備による多忙のあまり太陽が黄色く見えてしまうほどに疲れていた。何せ、店内の飾り付けは、もっぱら女子の学級委員が受け持つていたので、男子の僕は、おもに大道具の運搬ばかりやらされていたのだ。重たい机や椅子を運ぶため、教室と塔屋にある倉庫との間を何度も往復し、ひいひい言いながら階段を上つたり下りたりしていた。

もうダメだ、少し休もう……。

精魂尽き果てた状態でふと見ると、塔屋から屋上に出るスチール製の分厚い扉が施錠されていない事を発見し、「ラツキー！」とばかりに日の当たる場所で新鮮な空気を吸いながら少しの間サボる事にした。

子供の頃と違つて、空を見上げるなんて事は久しくなかつたが、学校の屋上から見える青空は、何だかとても清々しかつた……。

そして、ふと……、殺風景な屋上の片隅に、フェンスに寄り掛かつて文庫本に目を落とす女子の姿を見つけた。

春子である……。

途端に、僕の心臓がドキン！ と高鳴つた。

周りには、僕の邪魔をする低俗な輩など一人もいない。チャンス

である。この時点ではまだ好奇心の域を出てはいなかつたが、僕は、機会があれば一度彼女と話がしてみたかったのだ……。

わざとらしく口笛なんかを吹きながら春子に近づく。かなり接近してから、彼女は僕の存在に気付き、長い髪を揺らしながら顔を振り向けた。少し怪訝そうに眉を寄せていたが、静かな眼差しは変わらなかつた……。

さて、何を話そうか……？

しかし、こういうときに限つて、気の利いた言葉が浮かんでこないのが男子のバカなところである。僕は、さっそくバカな事を言つてしまつた。

「おい、こんなところでサボつてていいのかよ？」

別に彼女は、サボつていいわけではない。教室には居場所がないのだ。そんな事は分かつていたが、男子という生き物は、ときとしで興味のある女子に対してどうしようもなく意地悪したくなつてしまふものなのである。彼女の瞳に微かな悲しみの色が浮かんだのを見て、僕は、バカなセリフを吐いた自分にどうしようもない腹立たしさを感じた。

しかし、ここが彼女の不思議なところであり魅力でもある。春子ちゃんは、何を思ったのか、おもむろにポケットからジタン（タバコの銘柄です）の箱を取り出すと、可愛いキャラクターのシールを貼つた百円ライターで火を付け、秋の空高く香ばしい煙を吐き出したのだった。

「ちょっと、タバコが吸いたかったんだ……」

人見知りする春子ちゃんだったが、何故かそのときは、僕に対して親しげに、しかしほつりと淋しそうにそう言つたのだ。

さて、ここで氣の利いた文句の一つでも言えれば、僕も大したものだが、僕の吐いたセリフといえば

「ぼ、僕にも一本ちょうどいい」

なのだった。しかも声が上ずつてしまい格好悪いことこの上ない。でも春子ちゃんは、

「いいよ……」

と言つて自販機では売られていない（当時の話です）そのフランス製のタバコを一本恵んでくれたのだった。

タバコは、百害あつて一利なし！？ 本当にそつかあ……？ 少なくとも僕にとつては違う。だつて、僕は、タバコの煙を空に向かつて吐き出した瞬間に、とつても素直に言葉を発することが出来たから……。

「俺……お前の事……ちょっとだけ良いなあ……なんて思つてたりして……」

これだけ言えたら、あの言葉はスラスラと出る。

「お前、好きな男子とかつていてる？」

何だか自分がプレイボーイになつたような気がした。でも不思議な春子ちゃんは、つまらなさそうに空を見上げながらそつと文庫本を閉じ、そしてぽつりとこいつ言つたのだ……。

「ね……、今ここで、ふつてオナラしてもいい？」

僕は、思わず面食らつて吸い込んだ煙に噎せ返りそうになつたが、成り行きで

「い、いいよ……」

と言つてしまつた。

次の瞬間、小さな小さな音で、ふつていう可愛らしい彼女のオナラが聞こえて、同時に彼女が白い八重歯を見せながら可笑しそうに笑つた。入学以来、初めて見る事に成功した彼女の笑顔だ。

始めに述べたように、人がイジメられつ子にされてしまう瞬間なんて唐突にやつて来るが、誰かを好きになつてしまつ瞬間も唐突にやつて来る……。

僕は、この瞬間、春子に恋をした……。
イジメられつ子の不思議な春子……。

そして、この時から僕の小さな戦いが始まった.....。

おわり。

(後書き)

なんか、IJの続きを連載してみたくなりましたが、筆の止まつている連載が2本ありますし、SFも書かねばならぬので諦めます。でわ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5830e/>

愚案短章の一『いじめられっ子の春子ちゃんに恋をしてしまった……』

2010年10月8日15時44分発行